震災から27年 北播磨各地で追悼

阪神・淡路大震災の発生から27年となった17日、北播磨地域でも未曽有の大災害を振り返り、犠牲者を追悼した。東北地方が大きな被害を受けた東日本大震災にも思いを寄せ、市民や子どもたちは訓練を通じて防災への意識を高めた。

家族や友達 支えに感謝

父が震災関連死 神戸の長宅さん講演

西・中 加善防

加西市の善防中学校では、震災関連死で父を亡くした神戸市のカフェ勤務、長宅智行さん(34)が講演した。自らの経験や、病気、災害などで親を亡くした子どもを支援する「あしながの育英会」との出合いについて説明。「1月17日だけでも震災や防災のことを考えて。今回の話がそのきっかけになったらうれしい」と、全校生徒137人に呼び掛けた。

長宅さんは両親と兄姉の5人家族で、7歳の時に被災した。育英会で同校の飯尾太一教諭(41)が支援活動をしていたことが縁となり、同校に招かれた。

長宅さんは震災発生時、突き上げるような揺れで目が覚めた。父の「みんな大丈夫か」という声で、ほっとしたという。住んでいたマンションは全壊。しばらく近くの祖母宅に住んだ。

父が亡くなったのは3カ月後の4月の深夜。母親が残していた手記には「『うーん』と言う声が聞こえ、ガラスコップが倒れる音がしてゴーゴーと普通と違ういびきをしていた」と記されていた。震災のストレスや心労が原因となる急性心筋梗塞だった。

その後、長宅さんは情緒不安定になり、一番つらかったのは数年後だったという。「支えてくれたのが家族や友達。そんな縁を大事にしてほしい」と語り掛け、育英会からの支援や、その後、自身が遺児支援に関わるようになった経緯なども話した。飯尾教諭も支援に携わっていた当時の様子を紹介した。

遺児支援の活動紹介

2年生の見上心夏さんは「育英会など今まで知らないことがあって勉強になった。災害に遭ったら冷静に周りを助けられるよう頑張りたい」と話していた。(小日向務)

生徒たちを前に阪神・淡路大震災の経験を話す長宅智行さん＝善防中学校

ティアで学んだ防災

東北での活動 西脇北高生語る

西脇東中

西脇市内の小中学校と幼稚園では阪神・淡路大震災の犠牲者を悼む集会などが開かれた。西脇東中学校(同市鹿野町)では、東日本大震災で被災した宮城県でボランティア活動に従事した西脇北高校の生徒が被災者との交流などについて語った。

同市内の公立校では防災学習や避難訓練を実施。また、各地域の自主防災組織でも初期消火の訓練や倒壊家屋からの救出方法、消火栓の取り扱いなど、さまざまな訓練が行われた。

西脇北高は東日本大震災3年生の森翔麻さん(18)ら4人が現地の写真を示しながら状況を説明。津波で児童ら84人が犠牲となった石巻市の大川小学校では、学校の裏山に登れば多くの命が救えた可能性があったことを学び、「ひとつの判断が命が奪われるか、守られるかの分かれ目になることがある」と強調した。

幼稚園児の娘を失った女性のエピソードも紹介し、「被災地の人々の心の傷はまだ癒えていない。日頃の防災意識を高め、災害が起こった時には落ち着いて命を守ることが大切」と締め

風

黙

静岡出身の
の日」の記憶
当時7歳だっ
淡路大震災の
なく、同年の
事件の方が
る。子どもの
って、遠い関

目を閉じ

多可・生 統合

多可町会は
を開き、建